FOA-NEWS 通算第３１号
2011/10/12

# 大震災へのレモニア氏、クタイア氏からの義援金について

伊藤義樹

３月１１日の大震災から６ヶ月が経とうとしています。既に7月号のタッチダウン誌でも紹介されておりますが、今年の春にアメリカNCAA の審判員のレモニア氏とクタイア氏から今回の震災に対して義援金を頂戴しました。レモニア氏の義援金は津波で園舎が全壊した釜石市の釜石保育園へ送金しました。クタイア氏からは日本協会へ手渡していただき、協会を通じて日本赤十字へ寄付されております。
東北連盟の関係者の中にも震災・津波で被災された方がいます。

６月４日に被災した釜石市釜石にある釜石保育園を東さんと私で東北連盟の清野審判部長、岩手県庁勤務の山里氏、そして釜石市役所勤務で自宅を津波に流された川崎氏と一緒に訪問してきました。
写真の通り、旧園舎は津波に飲み込まれ全壊です。震災の時は約７０名の園児がお昼寝していましたが、パジャマ姿のまま、職員、近所の皆さんの活躍で近くの高台の公園に全員無事に避難できました。
瓦礫の町と化した釜石の海岸地域は震災直後危険地域として立ち入り禁止区域となり、親も園児の迎えができない状態で、最後に歩いて来た親に引き取られた子供は震災から３日後だったそうです。
避難した子供たちは、その後、避難した高台の隣にある病院に収容されましたが、卒園式は、その病院で執り行われたそうです。
現在は海岸より約５ｋｍほど離れた廃園となっていた幼稚園舎をそのまま活用して再開していました。両親と釜石を離れたり、仕事がまだ無かったりして、保育園で預かる子供はまだ元の人数には戻っていないということですが、色々なところから支援物資が届いて、保育園は少しずつ復活しているようです。

レモニア氏は３月末にロンドンの審判クリニックに招聘され、そこで我々のクリニックでも映像で利用している彼の編集したトレーニングDVDを日本の震災への寄付金を集めるためにロンドンの審判員仲間に販売をし、賛同した仲間がDVD を購入してくれたそうです。
同様に４月に根岸さん、阿部仁さんが参加したHonig’ｓ主催のクリニックでも同様にDVD を販売し、寄付金を集めてくれました。集まった寄付金は阿部仁さんに手渡され、関東審判部理事会へ彼らの好意を活かしてほしいと委託されました。
釜石市職員の川崎氏に寄付先をお聞きして、釜石保育園を紹介いただきました。

保育園に寄付金を現金書留で送付し、保育園ではその義援金で写真の大きなベビーカーを購入されたそうです。避難した後に流されてしまい、子供移動の際に困っていたそうで、レモニア氏の寄付金が大変役に立ったと喜ばれました。
その後もレモニア氏はクリニック等でDVDを販売して 7 月のウィーンの世界大会のときに東氏に追加の寄付金を託されました。
その分も釜石の保育園で活用いただけるように検討しております。
クタイア氏からは奥様と彼の気持ちを被災者に送りたいということで日本協会を通じて日本赤十字に寄付をしていただきました。クタイア氏は元サンフランシスコで警察官をされており、サンフランシスコ大地震のときに 3 日間不眠不休で震災へ対処した経験があるそうです。

地震で被災した人のことを良くわかっておられて、奥様と相談して少しでも役立てて欲しいということでお申し出がありました。

レモニア氏、クタイア氏、お二人の気持ちはすばらしいことだと思います。
我々も被災者を支える気持ちを持って支援していきましょう。

## Senior World Championship に参加して

田口　眞行

７月８日から１６日までオーストリアで開催されたSenior World Championship に関東審判部から田中淳夫氏とともに参加してきました。ご存知のように世界選手権は前回の日本での川崎大会に続き第４回目となり、World Cup はサッカーの大会名称であるため前記名称として開催されました。大会の参加国は８チームで、まず４チームずつの２つのリーグに分かれインスブルックとグラーツで予選リーグを行い、ウィーンに移動して同じ順位同士で最終順位決定戦を行いました。日本チームはグラーツでの予選リーグに所属したため、日本の審判はインスブルックでの予選３試合を担当しました。
大会期間中１６試合が開催されるため１２カ国から２９名の審判が招集され、内訳は開催国オーストリアからは5名、日本とアメリカから4名、ドイツとイギリスから3名、カナダとノルウェイとデンマークから2名、フランス・オランダ・セルビア・オーストラリアからそれぞれ１名という構成です。特記すべきは２９名の内２名の女性審判員が選出

されていることです。私達のクルーはＲ横町氏（関西審判部）、Ｈ田中氏、Ｌ高倉氏（関西審判部）、Ｓ　Perez-Canto（フランス）、Ｆ　Easton（カナダ）、Ｂ　Kerr（カナダ）そしてＵが私の７人で最終的にこのクルーで全４試合を担当しました。

当初、ウィーンに全審判員が集まりミーティングがあり、予選リーグの会場に移動する予定でしたが、ミーティングがなくなり直接インスブルックに行くことになり、伊藤義樹氏の見送りを受けて、大会の審判スーパーバイザーに指名された東氏と田中氏と私の３人は７月７日成田発のオーストリア航空直行便でウィーンに向かいました。ウィーンで乗り換え、インスブルックに到着したのは夜の７時、迎えてくれたのはインスブルック滞在中ずっとサポートしてくれた Andy で競技場を視察した後ホテルに向かいました。チェックインしてすぐ夕食、そしてミーティングが開催され、スケジュールの確認、自己紹介や諸注意などがあり、最後にIFAF（国際連盟）の会長のトミー・バイキング氏から激励の言葉がありました。１１時過ぎには関西審判部の２名が到着し全クルーがそろいました。

試合前日に初めて７人のクルーがそろったわけですが、５月からメールが頻繁に送られてきて、テストがあったり youtube の映像を見ていろいろ議論をする場がありました。特に７人のクルーは自己紹介をして審判歴や家族構成など、大会にあたっての不安や期待などを話していましたので、初対面という感じではなく、やっと会えた友人のように親しみをもつことができました。また、日本協会の計らいで６月１９日に川崎球場で行われた日本代表チームの壮行試合で関西クルーともクルーを組むことができ、英語でプリゲームミーティングを行うなど、準備万端でした。

予選リーグ期間中の日程は一日おきに試合があり、試合の日は７時朝食、９時からミーティング、１１時３０分昼食、１２時３０分ホテル発、１時競技場着。試合は第一試合午後３時開始、第二試合午後７時開始です。試合の翌日はまったくのフリーでした。

私達のはじめの担当試合は７月８日の大会開幕試合、アメリカ対オーストラリアでした。ヨーロッパの夏は暑く昼間は３５度もあり、午後の３時はまだまだ暑いなかでの試合でした。競技場に着いてから２時間の余裕があったのですが、チェーンクルーや計時関係のサポートクルーなどと打ち合わせがあわただしくおこなわれて、あっという間に試合開始時刻になってしまいました。大会の試合規則はIFAF のルールブックで行われました、ＮＣＡＡの2010 年版が基になっているものです。メカニックはEFAF（英国連盟）のものを使いましたが、Ｕがフリーキックの時にキッカーの位置にいたり、セレモニーの時に Ｕ がＲの横に立っていたりと違いがありました。ヨーロッパでは独自の選手権がいろいろな年代に分かれて開催されており、自分たちの考えに基づいてメカが決められていることを感じました。また、審判用具は必ず手荷物で持参し、シャツにマークがついていてはならない、帽子はアジャスタブルであってはいけない。時計は黒、ホイッスルはFOX40、ビーンズバッグは青などと細かく指示が出されていました。試合が始まるとそれまでの不安は吹っ飛び冷静に試合をコントロールすることができました。

次の試合は一日おいてメキシコ対オーストラリアでした。メキシコチームには英語を話せる人がコーチに一人しかいないので、コミュニケーションを取るのに苦労しました。以前は荒っぽいチームだったこともあったと聞いていましたが、国の代表とい

うことで荒っぽいプレーはなく、フットボールを理解し、まとまりがあると感じました。

試合のあった夜は全員でホテルの外に出て、ビールを飲みました。試合の前日は飲まないことになっているので、試合後が唯一のリラックスする時間でした。試合のなかでのミスも気持ちの切り替えができ、次の試合に臨む気持ちを作るひとときにもなりました。本当に陽気な集団でした。

そして３試合目はオーストラリア対ドイツを担当しました。ドイツもここまでで２敗しており勝利への執念を感じさせる試合でした。予選リーグを担当したなかではメキシコチームが洗練されていてとても良い印象を受けました。

予選リーグの試合はインスブルックの試合のない日にグラーツでは試合が組まれており、東さんはなんとセスナ機で両都市間を移動し試合を観戦し審判評価をしていました。私たちは移動して日本戦を見ることができませんでしたが、日本対カナダの試合は現地でもテレビ中継をしていました。しかし、フットボールとテニスの二元中継でテニスの場面の時に逆転されてしまい、画面が切り替わった時には負けが決まっていて、大切な場面を見ることができませんでした。

担当した試合の映像は翌日には手元に送られてきてチェックをすることができ、クルーミーティングで使用することができました。東さんは１日中部屋にこもって映像のチェックに明け暮れていましたが、私達クルーは試合のない日には近郊への観光が予定されており、気分転換を図ることができました。

予選リーグが終了し、ウィーンへの移動は車でした、ドイツのアウトバーン経由の方が早いということで国境を越えての移動でした。途中サウンド・オブ・ミュージックで有名なザルツブルグで休憩し、７時間かけてウィーンに到着しました。大会も終盤になってようやく全クルーがそろい、Bill にも再会をすることができました。ウィーンではポジションミーティングが開かれ、それぞれのメカの調整や予選リーグで担当したチーム情報を交換しあいました。最初に書いたように、当初は予選リーグのクルーをばらばらにして順位決定戦の担当を決める予定でしたが、３試合担当したクルーのチームワークは財産であるとの考えから、同じクルーで臨むことになり、私達のクルーは７・８位決定戦（オーストリア対オーストリラリア）を担当することになりました。試合開始前の演出は花火はあがるは、火の粉は飛び散るなど派手なものでした。ヨーロッパの人達は本当にスポーツを楽しんでいるのだということを実感することができました。

日本の３位決定戦は観客席で応援をすることができました。日本から駆けつけた後藤先生、根岸さん、國崎さんとともに応援をしました。

フットボールはオーストリアではまだマイナースポーツであるということですが、決勝戦には２万人以上の観客が集まり、ウェーブが起こるなど、試合は大変盛り上がりました。試合運営等すばらしく、成功裏に大会は終了しました。

大会の翌日にはアフターゲームパーティが開催され、日本チームもリラックスした雰囲気で参加し、交流を図ることができました。帰国便の機内では大会結果がアナウンスされ、乗客の方々から拍手が起こりました、そして成田では多くの報道陣が・・・残念ならが、我が日本チームへの取材ではなく、同時刻に帰国したなでしこチームへの取材でした。いつの日か日本のフットボールもあのような取材があることを期待しながら、雨のなか帰路につきました。

今回の大会を通して、各国がアメリカンフットボールを研究し、身体が大きいだけでなく技を身につけてきて全体の力をレベルアップさせていることを感じました。特にヨーロッパは陸続きという利点を生かして、国際試合が頻繁に開催され、競技人口も増加しているなかで、各国が競い合っていることは日本にとって今後脅威となっていくことでしょう。また、審判員も国際試合を多く経験できる環境のなかで、プライドをもっており、ヨーロッパという陸続きの関係のなかで団結しており、私たちも言葉や距離の壁を乗り越えていかなければならないことを強く感じました。英語で喧嘩ができる力がないと国際大会ではリーダーシップを発揮することができないと思います。２名参加した女性審判員も予想以上に基本に忠実で、すばらしい活躍をしていました。

今回の大会の審判に推薦していただいき、素晴らしい体験をすることができたことに、伊藤義樹氏をはじめ日本協会、関東審判部の皆さんに感謝いたします。この経験をこれからの審判活動で恩返しをしていきたいと思います。いろいろありがとうございました。

# Great Lakes College Football Officials Clinic (GLCFOC)

# (2011/4/6－11)参加報告

阿部仁、根岸作力

審判グッズをアメリカのHonig’s社から個人輸入されている方も多いと思うが、その創始者の息子で現オーナーのDick Honig氏（元 Big Ten レフリー）が取りまとめ役として毎年４月に開催しているのがGreat Lakes College Football Officials Clinic (GLCFOC)である。Great Lakesとは五大湖、その五大湖のうち４つの湖に接しているのが、ミシガン州であり、参加者はミシガン州を中心に東はオハイオ州、西はミネソタ州、さらにはアジア（日本）と、幅広い範囲から審判員が250名近く参加した。今回はビル・レモニアさんの紹介で根岸、阿部の２名がFOAからGLCFOCに初参加することになった。合宿は木曜日の朝に始まり、金曜の夕方まで２日間の座学および小グループセッションが続く。最終日は大学の練習試合での実技クリニックだ。ＦＯＡ的にいえば夏合宿と旧人フィールドクリニックがパッケージなっているようなイメージだ。

全米で行われる審判クリニックは3～4月に行われるものと６月（ネバダ州・リノ）に行われるものがあるそうで、夏のクリニックは一部リーグの審判クルーに欠員が出た場合、どの新人をクルーに引き入れるかのオーディション的要素が強く、クリニックといえどもかなり競争的な要素が強いそうだ。対して春の時期に開催されるクリニックは、一部の参加者はオーディション目的で参加するが、大半は個人のスキルアップと人脈作りが目的のようだ。

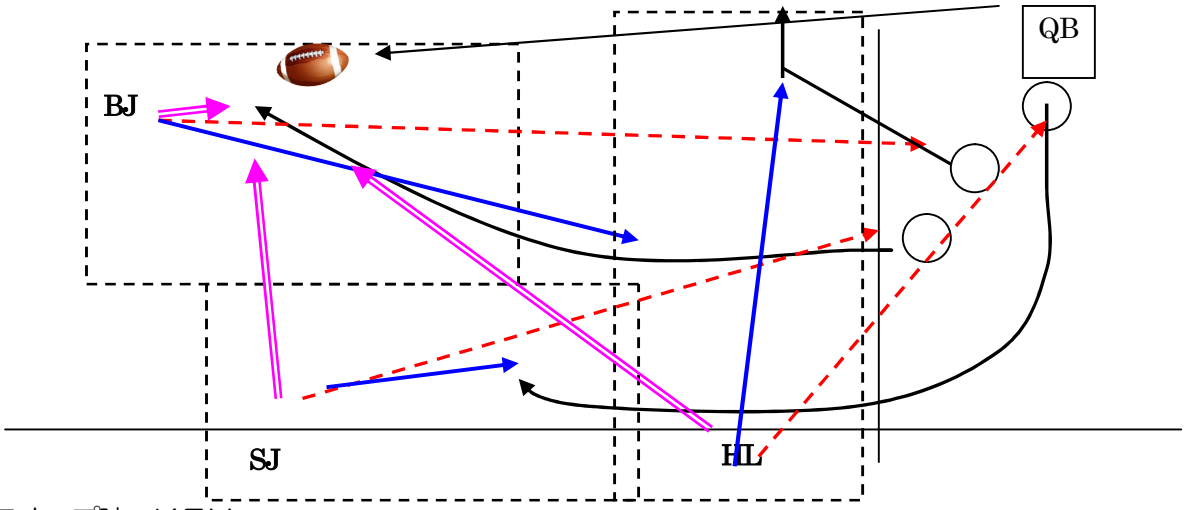
座学のセッションでは、レモニアさんがクリニック参加者に東日本大震災への支援を呼びかけ、彼の販売するトレーニングDVDの売上をご寄付いただいた。2月にロンドンで行ったクリニックでの寄付と合わせ、1750ドルの小切手を託された。審判というよりも、人間として強い絆でつながっていることを実感し、ひたすら感謝の気持ちでいっぱいである。

３日目の土曜日は地域の７大学で行われる紅白試合を使って２クルーがフィールド・クリニックを行う日となっており、この日はクリニックの技術委員によって審判の動きが評価されるため、前日のプレミーティングではみんなそれなり緊張しているようだった。根岸、阿部はクリニック会場から車で２時間離れているウェスタン・ミシガン大学(WMU)でのクリニックに参加することになった。当日、レモニア氏は急遽ネブラスカ大学で行われる練習試合の審判クルーに借り出されたため、朝５時におきてレモニア氏のトラックを運転して、WMUのあるミシガン州カラマズー市まで車を飛ばした。

朝８時、大学のスタジアムに到着。WMUはアメリカ１部リーグの中でも比較的マイナーなMid American Conferenceに属している。全米126の一部リーグ大学の中で、ランキング的には90位前後。それでもスタジアムの収容人数は35000人、ホームチームのロッカールーム設備も立派なものだ。ホームチームのロッカーを通過してビジターチームのロッカールームに入る。ホームチームの設備よりあからさまに狭い、古い、汚い。審判員の事前打ち合わせはそこで行い、９時半にフィールドでの実技クリニックが始まった。

今年から、ＮＣＡＡは黒のパンツに統一されたため、フィールド・クリニックのためにわざわざ黒パンツを購入した。ゆるゆるの生地で履き心地は悪くないが、個人的には白のニッカの方が気が引き締まる。ポジションごとに3、４名の審判員がいて、２シリーズで交代というローテーションである。約90分、7-on-7、11-on-11のドリルに審判としてはいり、その後大学が作成してくれたＤＶＤを見ながらの振り返りのセッションと続いた。セッションで一番印象に残ったのは、パスと読んだときの

クルーのカバレージがゾーンに切り替わることを強調していたことだ。スナップ時のキーによるファーストコンタクトの恐れがないと判断した時点で、ＨＬは 10 ヤードのベルトゾーン、ＢＪはポストパターン、ＦＪ／ＳＪはサイドラインのフライパターンへと、マンツーマンからゾーンに切り替わることを解説していた。そしてパスが実際に投げられたら、キャッチの周辺に視点を移して Box-In する。いわゆる Man-Zone-Ball の考え方だが、図に描くと次のようなイメージになる。




スナップ時のＫＥＹ
パスと読んでゾーンになったときのＫＥＹ
パスが投げられた後のＫＥＹ

この時、プレーに関わっていない審判員は周囲や後ろを注視し、デッドボール・オフィシエイティングを忘れてはならないということも強調されていた。クルーのダイナミックな動きを実際経験したプレーを使って説明してもらったので、非常に説得力があった。

　この後シカゴに向けて３時間ほど運転し、ネブラスカ大学から戻ってきたレモニア氏をシカゴ空港でピックアップして、その夜はご好意によりレモニア氏宅に一泊させていただき、フットボール談義に花を咲かせた。翌日のシカゴ～成田便はいつものように爆睡して帰国したのは言うまでもない。

フィールド・クリニックの様子（映像）は：
http://www.youtube.com/watch?v=crRkafP570E